# 久ちゃん

蕪木寿江

私の最初の先生、久ちゃんも今年で二十一才になる。一月十一日のお誕生日に間に合うようにカードを求め、雪のハンブルグに送る。

五才の十二月にカルホルニャから帰国、翌一月にお姉さんを入園させて欲しいと見えた双子の久ちゃんも一緒についてきて帰らないので、双子のこととて不憫に思い様子を見ることにした。四才で罹ったホンコン風邪のビールスによる後遺症で脳障害をおこし、お母さんの顔もわからず、しゃべらず排泄の習慣も〇才に逆戻りと、すべて〇才からやりなおした。歩くことはできるが、二年たっても二才になれない部分が多かった。顔色は悪かったが背丈はお姉さんより幾分高く、可愛く明かるい性格で、一定の友達を好きになるわけではないが誰の中にも入っていき、初めから人間がこわくはないことが救いだった。

三学期の転園者ということで、クラスの子ども達の方も余裕を持って接し、その日から仲間として遊んだ。わらべうたの輪の中に見かけたり、手をつないで鬼ごっこをしたり、あや取りの毛糸を指にかけてあげるなど、私の不安をよそに久ちゃんを入れた生活が自然にはじまっ

た。とある日、久ちゃんの姿が見えず大さわぎになって、車や自転車で探すと、家の方に向って歩いている姿を見つけた。近辺は開拓中の処が多くダンプの烈しい道でもあり、思わず怒ってしまったが、本人にはあまり通じなかったようだ。

幼稚園をおことわりするにも近くに住んでいることだし、お姉さんについて来るし、第一、日に日に可愛さが増し、喜んで通園してくるのを、とてもことわるわけには行かず、さりとて生命に関することでもあり、門からでた道の所にお母さんに居ていただくことにした。寒い日も、ネッカチーフをかぶって電柱にもたれて本を読んでいた姿が今でも浮ぶ。今から思うと慙愧の念にかられる。危険防止と共に、お母さんが傍にいると寄りかかり、何もしないでおんぶをせがむので、なんとか自立させたいと園の外で立っていたのでしょうが……。こわいことである。お母さんにやって貰いたかったら、傍にいてもらうことがむしろ自立への近道であるのに、不勉強とはよかれと思ってこういうあやまちを犯す者である。

お姉さんは四月から入学し、久ちゃんは又私のクラスに残った。園側としても安全を期してやめさせた方がいいのではないかとの意見があったが、本人は屈託なくいつもニコニコして登園する。その姿にそれも言えずにいた。家に帰っても久ちゃんのことが真先きに浮び、それからクラスの子どものことを思いだす毎日だった。ご飯をよそう瞬間も、床についてからも久ちゃんがふっとでてくる。これでいいのかな、あとの三十九名に申しわけがないのではないか、毎年お茶の水女子大学で行なわれる夏季講習会の折に、受付けの近くにいらっしゃった附属幼稚園の堀合先生におそるおそる伺った。「久ちゃんのことがいつも頭から離れずこれで教育者としてよいのでしょうか」と思い切って聞くと、私の肩をポンとたたかれて「あなた良いことをなさっていらっしゃるのよ、頑張って下さいね」と言われた。心臓がドキドキして御礼もそこそこに席に着くと、一度に涙がこみあげてきた。

その十月のはじめに、夕方お母さんとお使いに行って一足先きに帰った筈の久ちゃんがいなくなった。すぐ目と鼻の先だったので大丈夫と思ったのだろうが見あたらず、遂に夜の七時の有線放送で「六才の女の子が迷子になって見つかりません。市が尾幼稚園の制服を着ていま

す」と流れた。小さな農村地帯ですし、「制服」と言うところでいろいろと迷惑をおかけした。懐中電灯を持って大声で叫びながら手わけをして探した。間もなく二四六号線の交差点で信号待ちをしていた運転手さんが見つけて知らせてくれた。道路わきの芒の中に蹲んでいた。家のすぐ近くにいたのだ。抱きしめては泣いて久ちゃんを怒った。久ちゃんは小さい声で覚えたての「ごめんなさい」を繰り返していた。口だけが無表情に動いた。

月に一度は発作におそわれ、何秒かは意識不明になり痙攣を伴なった。大学病院で二週間単位の投薬を受け、ときには興奮状態で走りまわりつまずいて転んだり、せっかく高く積みあげた積木にぶつかってこわしたりした。「だれだー」とふだんからけんかっぱやい男の子がどなっても、久ちゃんだとわかると「いいんだよ」とふりむいて声をかけ、又ある時は机に臥したまま眠る日もあり、その度にまわりの友達が自分の遊び着をぬいで久ちゃんの背中にかけ、何枚ものやさしさの布団に包まれて眠ることもあった。

一月のお誕生会では指に水色のリボンをつけて「仲良し蝶」のリズム劇の雨になった。久ちゃんの動きに合わせて雨達が踊った。三月のお雛祭り会では、終りの言葉を覚えてマイクで話した。久ちゃんが上手に言えると友達が拍手してよろこび、その度に久ちゃんもよろこび、久ちゃんがよろこぶと又友達がよろこんだ。久ちゃんに学びながら次第に先生方のアイドルになっていった。

四月からは遠くの特殊学級に行った。一年から六年までの七人のクラスで五十代のよさそうな男の先生が受け持っていた。休日を利用しては見に行ったが、二度ともジャングルジムのてっぺんにいた。高い処は一番安全な場所なのだろう。一年通って転勤でアメリカへ行った。無学年制で、その子に合った教育がなされ、家では犬を飼い動物好きの久ちゃんがよく世話をすると便りを受けた。十五才でひらがなとかたかなが少しずつ書けるようになり、お母さんの言ったことを一字一字丁寧に書いてきた。

それから現在のハンブルグに移った。卒業間近の学校への送迎は、行きはお母さんがして帰りは久ちゃんの為に、一人の先生と、一人のポリスが隠れるようにしてバスに乗り家まで送って下さり、一人立ちができるようにとの配慮に感謝している、とあった。

最近の手紙には「新学期より今度は男の先生で三人のクラスで勉強しています。今まで習ったことをなお繰り返し毎日実習するそうです。朝食、昼食用の買物からクッキングまで自分達でやる事になり、今までのように朝食のサンドイッチを持たせなくてもよくなりました。マーケットでどんな食品を買っているのか、毎日尋ねるのが楽しみで、久子も一生懸命思い出しながら答えてくれます」

「小さなハンブルグの中に四つもベアクスタットがあり、そこで働く事が決まるまで両親共の面接が二回（三月と五月）ありましたが、一度目は労働局の方が学校に出むかれ、校医と共に健康状態などをチェック、二度目は実際に働くベアクスタットへ我々が出向き面接の上、これからやる初歩の仕事を二、三取り上げ、実際に皆の前で試みたりと、親も子も納得のいく行き届いたやり方ですっかり感服してしまいました。労働局―ベアクスタット―学校とが一体となっているからこそで、日本にもこんなシステムがあれば障害児を持つ親はどんなに安心して毎日を過すことができるでしょう、とつくづく考えてしまいます」

「沢山の職種の中から一番適応した仕事を見つけ喜んで働いてくれればはげみにもなり充分な仕事ですのに、つたない労働力に対しては一ヵ月七千円の賃金を支払って下さるそうですし、終生そこで働けるとのお話でたんにゲストアルバイトとして永住している外国人としての私には夢のような話です」

便箋の終りに、来春には日本への転勤の話もあると書かれてあり、私はすぐに返事を書いた。「成人の障害者を受け入れるところはこの辺にはない。田口恒夫先生が栃木の山奥を開墾して、誰でも、いつでも、何日でも泊るところをと、自給自足をめざして畑を耕やしていらっしゃると伺うが、それも国の力ではなく、学問を探求する人の底に流れる愛情によるもの、もうしばらく日本に帰らない方がいい」と、急いで書いた。

戦前派の祖国を愛する者として、「日本に帰るな」とはなんという悲しいことだ。言語道断――。双子の姉は日本の大学に学んでいるし、親としてはいたばさみの思いだろうが、「日本に帰っていらっしゃい」と言える日は果して来るのだろうか。

（神奈川・市が尾幼稚園）